

〈特集「比較思想は現代に何を貢献しうるか」4〉

シンポジウム・コメント

三提題に触れるまえに次の二つのことをまず述べたい。一つは、これまでの本学会の節目ごとのシンポジウムを顧みると、個別的なテーマというよりは比較思想という学の根本にかかわる問題を抜本的に検討しようとするものが多いことが分かる。(例えば第一回「比較思想方法論」、第五回「比較思想とは何か」、第一〇回「東と西」、第一七回「比較思想の新段階」)そしてもう一つのは、今回の節目のテーマが「比較思想は現代に何を貢献しうるか」であり、具体的な効益にかかわる問題であるということである。思うに、それは、今回までにすでに「比較思想」なる学はその基礎づけを一応終え(もとより常に基礎づけは続けられねばならないが)、そのような学が現代の状況下でいかに生(せい)とまじわるか、いかに人間の学として役割を果たすべきか、という点を、前向きに問おうとする姿勢を示すものであるだろう。しかし反面また、このよう

峰 島 旭 雄

な問いが必然的に、そもそも比較思想とは何か、その方法論は、という問いをも誘発すること、生じうるのである。

このような俯瞰のうえで、今回の三提題をみると、第二の、清水良衛氏による提題は(『比較思想の現代的役割——産業社会に生きる社会人の立場から——』、直截にテーマに答える形をとっていると言うことができる。すでに『日本学のすずめ』を公にした同氏は、真の国際化は単に外へ向かってこれをなすのではなく、内に向かつて日本文化を確実に理解することから始まるという考えで、『国際理解のための日本学』を推進する。このような立場から積極的な発言のあったことは本学会にとって望ましいことであつた。そこで次に、第三提題のごとく、そもそも比較思想とは何か、の問いが必要となってくる。第三提題者、桑木務氏は急病で出席できず、詳しい説明は聞かれなかったが(提題は「比較思想の未

来」、その主旨はレジュメにも載っており、また数多くの著書のうち最新刊『哲学するところ』によってそのやや詳細な主張を見ることが出来る。氏の主張の根幹は「哲学の家」（レジュメ参照）であつて、この基本構図から比較思想の学もまた導出される。つまり、比較思想の学問論であつて、ただちに、現代、現実の問題に比較思想はどう答えるべきか、というような、具体的問題への応答ではない。しかしながら、じつは、このように比較思想を学として基礎づける試みを通してこの現実の問題に対しても確実に責任ある応答をなしうるものであることを忘れてはならない。学問論は当然、方法論を含む。第一提題者、酒井潔氏はまさしく方法論にかかわる。（提題は「アナロギアの論理と現代世界——多様性と調和の学的創造に向けて——」）ただし、加うるに、他にあまリ例を見ないいちじるしい特色がこの提題にはある。それは氏の専攻するライブニッツの思想を通して、方法論を提示するということである。しかもライブニッツは西洋に伝統的な（形式）論理学に充足理由律を加えた哲学者であるし、また中国思想への関心によつて西洋におけるきわめて初期の比較思想家とも言える人物なのである。氏がライブニッツから摘出した論理（方法）は類比（アナロジー）の論理（方法）である。一九二三年にフランスのマソン・ウルセルが類比（アナロジー）の方法をたずさえて『比較哲学』を著わしたことは周知のとおりである。

このように見てくると、今回の提題は第二提題——「何を貢献

しうるか」、第三提題——「学問としての基礎づけ」、第一提題——「方法の問題」というように、一つの円環をなすことが理解される。求められるのは、これら三者が相互に関連しあつて、現実に関与する比較思想の学を形成していくことであるだろう。

なお付言すれば、第一提題者は春秋に富む新進の学者であり、ライブニッツそのものにおいてもさらに比較思想方法論への可能性を探究しうるであらうし、それを軸として新しい比較思想学への胎動を感じさせるものがあるようにおもわれる。しばしば批判の対象となる、比較思想家は専攻領域をもっていないという評言に対して、いうまでもなく第一提題者についてはそのことは論外であると言わなければならない。いなむしろ、確実に専攻分野をもち（東洋であれ西洋であれ、それにおいてしかるべき業績を上げつつ、それがおのずから比較思想への展開を促すという好例を見ることができるといえる。第二提題者はいわゆるアカデミズムの中にあるのではなく、実社会においてエネルギーに活動しており、ときに高等教育機関等において講義に従事しておられる。比較思想とは、発生的には、まさしくそのような状況、そのような探究者を通じて、現われるべくして現われたものであることを、思うべきである。第三提題者はかつてアカデミズムの長老格にあるのであるが、そのがっしりした学問論をもつてしかも現実に関与的に発言している——生命倫理、宗教の未来、とりわけ比較思想の未来等々。このようなわけで、今回のシンポジウムは第

二〇回を数えた本学会業績の一つの集約であるとともに、二一回、つまりは二十一世紀へ向けての新しい出発にふさわしい成果を示したものであると言える。

ちなみに、世代からいっても、四十代・五十代・六十代（コメント・八十代というバランスであった。

（みねしま・ひでお、比較哲学、早稲田大学教授）